

# 公 奉 育 保

## 遂 完 勝 必 爭 戰 亞 東 大

敵

倉 橋 惣 三

たゞならぬけはいの中には喜んで、子らの二組が相對峙してゐる。一方が優勢とみえて、のしかゝるやうに、口々にわめきたてゝゐる。

「負けた方が米英じやあないか」

「いやだいい〜」

さつきの戦つことに、おきれ氣味になつてうしろを見せたのであつたが、米英と罵られた一言に、きつとなつて振りかへつた小がらの子が、肩をいからして叫んだのである。

それにつゞいて、足なふみだして、敵がたを睨みかへしたのは、大がらの子である。

「なにッ」

この權幕に、折角く勝味に氣おつた方の子らも、聊かたち〜とした。

「でも逃げたんじやないか」

その聲の調子には、どこか相手の氣もちを諒とするとこゝろありげなものを含んでゐる。

「砂なんか、ほうるからさ」

大がらの子は、また半歩ほど踏み出した。

「砂は毒瓦斯だから、ほうつちやいけないと先生が、おつしやつたよ」

小がらの子が口をどがらせていつた。そして、顔を眞赤にしてつゞけた。

「毒瓦斯なんか使ふ方が米英じやないか」

「なにッ。——どつちだつて米英なんか」

相手を假りにも米英と口走つたのが悪かつたと思つてゐるところへ、投げてならない砂を使

つたのが氣を替めて、我れ識らず出た言葉が、

「どつちだつて……」だつたのである。

「そうだ〜。さつちも米英じやないんだねえ」

「そうさあ」

「そうだねえ」

「いっしょに米英やつつけようよ」

「そうだ。いっしょに、山の方へどつかん。」

この光景を傍で眺めてゐた先生は、そつと、口もとに笑を浮べながら思つた。——子らの戦つことは戦じやあない。——それにしても、よくまああんなに、ほんどうの敵を憎んでゐる。

（戦時幼稚園小景二六）